

とても静かな夜 (A very quiet night / ليلة هادئة جدا)

とても静かな戦争の夜。昨日は、ひどく静かだった。1時間くらい眠っただろうか。ドローンや戦闘機、大砲の音が一瞬たりとも鳴り止まなかったが、それらは何てことはない。

ミサイルや、1トンもの火薬の入った爆弾が落ちたとき、あるいは6つの爆弾が同時に落ちたときは、大地を揺るがし、持ち上げ、揺さぶり、まるで地球の地殻が、空気がいっぱい詰まった風船のようで、今にも爆発して世界が破裂しそうになる。死を何千回も目の当たりにした爆発の後では、自分がまだ生きていることが信じられず、新たな命の瞬間を与えられるように感じる。そして、次の爆発、次の死を待ち続ける。それは、せいぜい1分か2分だ。

本当に静かな夜。眠る前に十分に食事をする事ができた。30人に豆の缶2つというのは異例のことで、夕食は豆の缶を祝っての盛大なパーティーのはずだったが、30人にパン5切れしかなく、台無しとなった。それは、私のせいだった。

“パーティー”の前、私が通りに立っていると、2人の娘を連れた男性がやって来て「パンをくれ」と言ってきた。3日間食事を取れていない2人の娘に食べさせたいと言う。最初、私は「パンはない」と答えた。でも少女を目にしたとき、慈悲の弾丸のように、その瞳が私の心に突き刺さった。私は彼に待つように伝え、パンを5つ持って来た。彼の震える手がどうやってパンを受け取ったのか、私は一生忘れることはないだろう。2人の少女の目は輝き始め、彼は私に感謝の言葉を述べながらすぐに去っていった。まるで、大きな戦利品を持って逃げていくかのように。彼は誰にも見られたくなかったのだ。

時に、静寂は退屈になる。とりわけ、友人が夜中にまだ生きていると安心させるために電話してきたときは。しかし幼馴染みのユセフとアドナンとその家族は少し前に犠牲になった。私がどれだけアドナンの娘、まだ3歳に満たなかった悪戯好きのサマルを好きだったか。彼らを訪ねるたびに、彼女は私に向かって走ってきて、私の首にしがみついていた。彼女の黒い目、巻き毛、そして年齢に釣り合わない高い身長、私たちはサマルがバスケットボールのチャンピオンになると信じていた。

とても特別な夜。電話を切ったすぐのこと、どうやって私の意に反したのかわからないが、涙が溢れ出していた。

そうして眠りについた私たちを目覚めさせたのは爆音と、その後のトタン屋根に降り注いだ大きな雨音だった。私たちはその下で寝ていて、その音が雨ではなく建物の破片のせいだと気づくまでに少し時間がかかった。それほど遠くない建物から数千の破片が飛び散り、トタン屋根を貫通したのだ。建物の跡には大きな穴ができ、わずかに数本の柱と何十年もそこに植えられていたヤシの木だけが残っていた。それは、何が起こったのかを目撃し続けるために死ぬことを拒否したかのように、奇跡的に立ち続けていたが、胸に抱いていたヤシの実の多

くが落ちてしまっていた。

あまりに致命的な静けさ。アルジャジーラのアナウンサーが「戦争が始まって以来最悪の夜だった」「平穏は1分たりとも続かなかった」と言っているのを聞いた。あまりの静けさに、私の神経は張り裂けそうだ。ドローン、飛行機、大砲……どうしたらこの恐ろしい静けさの中で書くことができるのでしょうか？それは人間の精神には耐えられるものではない。いつ死んでもおかしくない。それはもはや大惨事ではない。地面は揺れ続け、火薬の匂いが鼻腔を満たし、煙が立ち込め、爆発は止まらない。その中で私はまるで周りで何も起こっていないかのように、書くために机の前に座る。どうやら私は気が狂ってしまった。あるいは私は死んでいる。

私は私の声を世界に届けるために、最後の一文字を書くまで抵抗する。騒がしい世界は私たちのような静けさは望んでいないだろう。さあ、私たちのニュースから顔を背け、チャンネルを変えて、あなたたちはその賑やかさを楽しめばいい……私たちはあなたたちをかき乱すことを恐れている……良い眠りをお祈りします。

2023年10月10日

アリー・アブー・ヤースィーン

訳 藤田ヒロシ

(2024.8.30)